

# 乾漆造形作品「Core」制作技法

「日本・韓国 現代漆芸作家による漆芸の現在」展より

会津大学短期大学部

産業情報学科

井 波 純

## 乾漆造形作品「Core」制作技法

### 「日本・韓国 現代漆芸作家による漆芸の現在」展より

井 波 純

平成 18 年 12 月 15 日受付

【要旨】 2006年9月28日より東京芸術大学大学美術館に於いて、「日本・韓国 現代漆芸作家による漆芸の現在」が開催された。この展覧会は、東京芸術大学美術学部工芸科漆芸研究室が主体となり、日本、韓国それぞれで現代漆芸家として活動している作家からセレクトし、あらゆる視点から漆を素材とした美術造形表現を一同に介するというもので、大きなオブジェ作品から日常生活に用いられる工芸作品まで幅広く網羅する類い稀な展覧会となった。

今回、招待作家として選出され作品展示するにあたり、自らのこれまでの造形表現の結集として制作に挑む事を決意し作品制作にあたった。

#### 1. はじめに

##### 乾漆について

乾漆とは、明治以降に付けられた漆芸技法名であるが、簡単に言えば、原型に麻布を漆で幾重にも貼り重ねその後、原型を抜いて形体を表し塗りを施して仕上げていく技法である。古く飛鳥時代の頃、中国から伝わった技法であり夾紵棺（きょうちよかん）と呼ばれる藤原鎌足のものが最も古いものとされている。また、奈良時代には仏像彫刻もこの技法で盛んに行われ、当麻寺の四天王像は最も古い乾漆像とされている。

今回の制作では、この乾漆技法を用い、これまで培ってきた轆轤の技術を生かしながら大型の作品を創りだすこととした。

## 作品「Core」について

近年、轆轤を用いた造形的器物の制作を続けてきたが、その造形意識の根幹には、それまで接してきたアジア文化に対する所思が大きく影響している。1980年代後半より漆文化の源流を研究調査するためアジア各地を訪問したが、辿り着いたのは荘厳なミャンマーの仏塔パゴダやチベット地域で出会った様々な仏具や生活の中に見られる轆轤の造形であった。簡潔で造作のしやすい轆轤はあながち安易な造形と見られる事も多いが、その単純な回転体としての表現の中にはほんの少しの角度や曲面のバランスの違いで挽いた人の人柄がはっきりと表われるほど深さがある。その回転体の中に輪廻転生と人類の宇宙観にも繋がる永遠性の現れがあるという感覚も生まれてくるのかも知れない。

純真無垢なまでの仏教に対する強い信仰心。決して無理強いする事のない人々のまなざし。俗物的資本主義国家に毒されていない多くのアジアの人々の中には、(それは単なる宗教思想としてだけでなく)生活とともに仏陀の教えが密にあるものと思われる。

この作品では、永続的な意識、天(宙)に向かう感覚、そして内包される本能と理性の混沌を表現する。

## 2. 制作工程

### 原型の制作

原型の制作はスタイロフォームを貼り重ね轆轤挽きにて行う。これまでにない大型の轆轤原型制作のため、片持ち式の轆轤では原型の自重と回転の力に耐える事が出来ず軸心がずれてしまう。そこで轆轤と旋盤の2台の機器の間を原型材料が橋渡しする形で軸心を両端で固定する方法を考案した。2台の機器の軸高とセンターの角度を一直線に調整しなければ高速回転時に破壊するおそれがあるため慎重に作業を進めるが、大変困難な作業でもある。(写真1)



写真1

### 原型の完成

スタイロフォームでの原型制作においては表面の粒子が粗く刃物の抵抗により原型に粗い穴状のへこみが出来るため、石膏を用い細部の調整を行い、最終的な仕上げを行う（写真2）



写真2

### 離形処理

原型を外す際、スムーズに外せる様に離形処理を施す。砥の粉を水で練ったものに糊を混ぜ全体に薄く塗布する。（写真3）



写真3

### 漆下地

漆、地の粉、砥の粉を混合したもので漆下地付けを行う。(写真4)



写真4

### 布着せ

下地付け終了後、漆と米糊を混合した布着せ漆で麻布を貼る。(写真5)

その際には布の貼り残しが無いように注意する。固化後、重なった余分な麻布を切り取り平滑な布面とした上で漆、砥の粉、地の粉を混合したもので布目摺り地付けを行う。

以上の作業を7回繰り返し、約5ミリ厚の層を作る。



写真5

### 漆下地、原型割り出し

布着せが終了したら、再び漆下地付けを行い、完全に固化した後原型を取り外す。今回の制作では、中に入れてある別体の乾漆造形物が割れた隙間より微妙に見え隠れしている表現が重要なポイントでもあるため、原型を外す為の切り込みの入れ方に検討を重ねた上でラインを決定し慎重に切り込みを入れる。(写真6)



写真6

### 内部の制作

内部に埋め込む胎を制作する。これまでと同様に乾漆制作を行い、最後に全体を金箔で仕上げる。(写真7)

### 外側の表現、塗り

外側の割れ目の部分は下地漆にて荒々しいマチエールを付け、(写真8)その後内部、外部ともに黒呂色漆にて下塗り、下塗り研ぎ、中塗り、中塗り研ぎを施す。中塗り終了後内部は黒、外部は朱の漆で2回上塗り作業を行う。この塗りは仕上がりにも影響を及ぼすため慎重な作業を求められる。

### 呂色あげ

艶を出すため呂色磨きの工程を行い、内部に胎を設置して上下に分かれているパーツを接合する。

### 完成(写真9)



写真 7



写真 8



写真 9

### 3. 「日本・韓国 現代漆芸作家による漆芸の現在」展に関して

今回制作した作品「CORE」は「日本・韓国 現代漆芸作家による漆芸の現在」展にて陳列された。この展覧会は2006年9月28日～10月15日の間、東京芸術大学大学美術館にて開催され、同年11月3日～11月27日までは石川県輪島漆芸美術館において開催された。日本側49名、韓国側からは40名の招待作家が作品を陳列し、年齢も20代から50代までと、美術工芸界では若手と呼ばれる世代の展覧会として表現の幅も広い様々な作品が集まっている。また、この展示をきっかけに、参加した作家達のプロフィールや代表作品についてまとめられた著書も出版されている。漆が持つ幅広い表現性をより多くの人々に伝え、また次代を担うべく活動しているそれぞれの作家達の思いも深く伝わる展示企画であったといえよう。

#### おわりに

現代の社会において、コンピューターを中心とした文明の構築は致し方ないが、その世界だけを中心とした社会構造意識は人間にとって間違いはないのか？

工芸技術の中にある手仕事の分野は人間の感性とともに文化を築き上げてきたといえよう。ヒトの意識はバーチャルだけではない実在感のある暮らしを求めないのだろうか？

疑問符は尽きないが、今後、漆芸だけではなく日本の工芸文化全体を単なる趣向品としてだけではなく、もっと存在感のある世界として提示していく努力を自己の作品を通して語りかけていきたいと考える。

#### 参考図版

「日本・韓国 現代漆芸作家による漆芸の現在」展 展示風景他

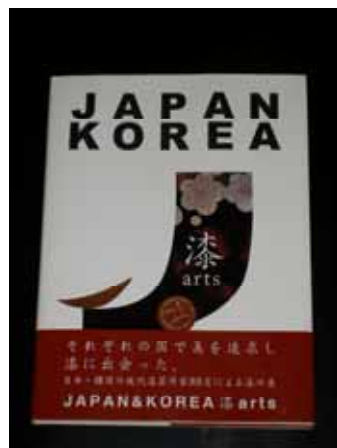
東京展







輪島展



出版書籍